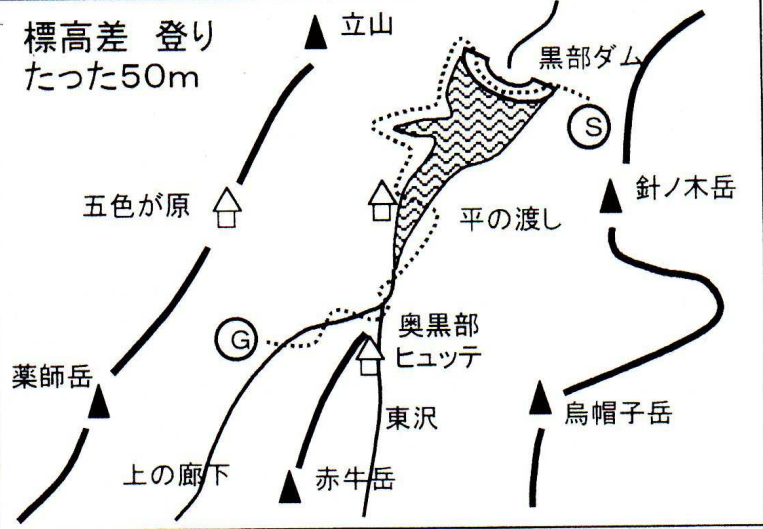


2度と無いチャンス？ 黒部川上の廊下

02年8月10日(土)	下土狩12:00～穂高かもしか～大町温泉郷17:00～扇沢(車中泊)21:00
02年8月11日(日)	扇沢6:30～黒四ダム8:50～平の小屋9:45～渡し10:05～入渓12:00～ 東沢出合い12:40～テント14:45～就寝20:00
参加者	CL 後藤隆徳 25年ぶり、平の小屋の少年は主人。やはり飲んべえのようだ。
	加藤秀子 あこがれの上の廊下。明日を待ちきれず、泳いじやった？
	報告長岡浩一 緊張の1日は終わった。明日は？

8月10日(土)
この2・3週間、胃が具合悪くなる程緊張と心配で過ごした。去年、さもない事で脱臼した左肩が気になる。泳ぎも、静かな海でしか泳いだ事がない。まして大きなザックを背負ってなど……。出発1週間前、天城湯ヶ島町の狩野川本流で、



深いドン淵をザックにつかまりながら、ザイルに引かれて泳いで渡る訓練をした。この方法はいい。心配は少しは和らぎ、チャンスはもう無いぞ、と参加の決心をする。

穂高町のカモシカスポーツに買い物に寄ると、ダンプさんがいて、殉職した東邦航空の篠原さんの話などをした。店の東側の広い芝生の庭はヘリが降りる為のものだそうだ。大町温泉郷にさっと浸かり、駅前の養老の滝で夕食。20時扇沢到着、かなり涼しい。21時就寝。

8月11日(日)

まあまあの天気。6時半の始発トローリーは、ほぼ満員。ザックをトラックに積むと、受け取る時遅くなるので抱えて乗る。ダムに出ると雲が多いが、暑くなくてちょうどいい。ダムの上で、細い右手のバランス重りをはずして来るのを忘れたのに気付いた。泳ぐのに邪魔だし、どうせ帰りにまたダムを通る??ので、トンネルの中に置いていく。

アルペンルートをはずれると、ほとんど人がいなくなる。ロッジくろよん迄は自転車で行けそうな良い道。ロッジを過ぎてまもなく、タンボ沢を渡る。そして深い入り江に入って行き、どん詰まりで御山谷を渡る。数年前の5月連休に山スキーで降りてきた谷だ。入り江を出て岬に近づくと、1時間前に通ったロッジが近くに見える。なんと効率の悪い。湖面を見ると、流木が大きな丸いイカダの様に集まったものが幾つもできている。不思議な光景。ミステリーサークル？

周りの森はブナの大木がすばらしい。水平道とは言っても、少しずつアップ

ダウンが大きくなってきた。突然長〜いハシゴで沢に降り、もっと長いハシゴを登り返す。重荷でのハシゴ登りはつらい。12時の渡し船の予定だったが、10時のに乘れそうだと、後藤さんのダッシュが始まった。9時45分、渡し場着。汗だく。平の小屋にジュースを飲みに行く。

船頭は、平の小屋の主人。船を出すやいなや、ルアー(疑似餌)の付いた釣り糸をたれた。しばらくすると竿が大きくなった。流木でも引っかかったのかと思ったが、上がってきたのは大きくてきれいなニジマスだった。渡すたびに釣るそうだ。

対岸に着くと、去年穂高岳白出沢で会ったガイドの志古田氏が、元気なおば様パーティを連れていた。針ノ木谷を降りてきたのか、はたまた赤牛から来たのか。志古田氏は、以前後藤さんたちがヒマラヤへ行った時のガイドだそうだ。2年続きで会うとは、仕事で相当山に入っているのか。

また水平道を40分程歩いた沢のところで昼食とする。黒部湖もどん詰まりで、川らしくなってきた。これより道はずれ、平らな河原に行く。行く手を流れに阻まれ、12時いよいよ入渓。ネオプレンタイツをはき、沢靴に換え、メットをかぶって流れに入る。3人でスクラムを組んで渡渉するが、1回1回非常に緊張する。左から大きな沢が合流する。東沢だ。奥黒部ヒュッテは、この上らしい。広い川原で一休み。ここまで加藤さんがかわいがってきたミミズを餌に、後藤さんが釣り糸をたれるが当たりナシ。途中で餌用のバツタをたくさん捕まえる。

東沢を過ぎて水量がぐっと減った感じだ。少し安心する。大きくカーブした先に、ヘルメットをかぶった釣り人が2人いた。こんな奥まで、登山ではなく釣りに来るとは疑ったもんだ。

右岸で行き詰まった淵で、また後藤さんが釣り糸をたれる。追ってくるが食わないという。雨が降ってきたので、カッパを着て雨宿り？。だいぶ休んだが誰も来ない。もう少し進む。また右岸で行き詰まる。深くはないが流れが強い。後藤さんが止める間もなく、加藤さんが流れに飛び下りた。当然のように足をすくわれ、どんぶらこと流されていく。なかなか立てず、ザックに頭を押さえられ、ヤバいと思ったところで立てた。びっくりした。後藤さんと私は、少し戻ってスクラム組んで渡ったが、厳しかった。

上がったところは、少し高台になった広い川原で別天地。まっ平らな砂地にテントとタープをはる。着ているものをすべて石の上に干し、水を浴びてさっぱりする。

加藤さんは夕げの支度、後藤さんはおかずの岩魚釣り、私はたきぎ集めをする。谷が大きく回り込んだとこ迄行くと、下の黒ビンガの岩壁が見えた。あの先から難所が始まる。明日は朝から大変だ。

薄暗くなり、加藤火出子？さんが湿った木に上手に火をつける。後藤さんの釣った岩魚の塩焼きが焼き肉に加わり、豪華な夕食となった。8時まで焚き火を囲み、飲んで話をした。



会山行NO・238	山行名	2002・夏山合宿	報告者・後藤 隆徳
全体のコース	上ノ廊下～赤木沢	予定日程	2002・8・10～14
パーティー	CL後藤隆徳(55)・SL加藤秀子(53)・長岡浩一(43)		
事故日時	8月12日7:00頃	事故者・長岡浩一(43)	怪我の程度・左肩脱臼
事故場所	上ノ廊下・下ノ黒ビンカ上流300m付近の深み(図のA点)		

事故概要

10日・扇沢車中泊。11日・黒四ダム7時発。平ノ渡で25年前、12歳だった主人に再会。船上でしばし昔話。主人はルアーで30cmのレインボー・トラウトをゲット。凄い。

東沢から1時間半、下ノ黒ビンカ下流の広い河原でテン泊。静かな時間が流れる。後藤が毛ばりで15cm程のイワナを一匹釣る。合掌。

12日・4時起床6時発。天気晴れ。出発してすぐ下ノ黒ビンカを通過。左岸に大きな雪渓。

「口元のタル」を過ぎゴルジュに入る。右岸がヘツれないので、後藤が空身で渡渉し、後藤のザックのみザイルで渡す。流れが急で苦勞する。

長岡も渡すが渡しきれず、長岡・加藤は背負って渡る。流れの音が大きく対岸に声が届かず大変。その上流れ深みに入る。水が冷たい。

後藤がザイルの空身で右岸に向かい少し泳ぎ、岩壁を掴み渡りきる。その後、後藤のザックをザイルで引っ張る。

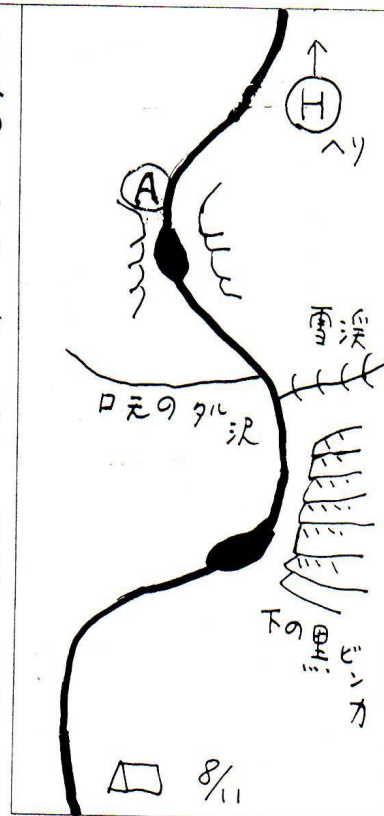
二番手は長岡。加藤が「どうする?」と問う。深みは長くないので、ザックを背負って来てくれと指示。長岡はザイルを付けザックを背負って深みに入る。立ち泳ぎで来れば身長がある長岡は全く問題がないが、水平に泳ごうとした長岡は悪い右手が抵抗なく水中を切ったので、少し焦った。顔も少し水中に没した。

その後、体が右手を下にねじれ左手で岩壁を掴み渡った。水から上がり長岡は開口一番「はずれたみたい(肩が)」と報告。7時だった。後藤が2度、3度挿入を試みたが入らなかった。全身が濡れて寒いので沢を少し登り広い場所でテントを張り、焚き火を行う。下から会報を交換している町田グラウスが6～7人来た。心配していただき助言と激励を受け湿布の手当てをして貰う。

8時、これ以上待てないので加藤と奥黒部ヒュッテに走る。長岡を一人にするのは心配だったが、出血がないことと、好天と、来る時の渡渉が3人でも大変だったことを考えた。二重遭難は絶対出来ない。

下から上がってくるパーティーに焚き火に薪をくべる事を頼みながら下る。9:30、奥黒部ヒュッテで救助依頼。ヒュッテはとても好意的だった。

再び上り返すとビンカ付近でヘリが飛来。現場に12時到着すると、昨日後ろから来た仙台山岳会パーティーがいて、いまさっき(11時45分位)ピックアップ



されたと報告を受ける。

長岡が残したテントなど背負って再びヒュッテに下る。ヒュッテに戻ると、ヘリは富山県の防災ヘリ、病院は富山県立中央病院と聞かされた。とても疲れたので、そのままヒュッテにテン泊。ビールは、ほろ苦かった。

13日、4時発。6時20分の船で渡る。主人は先刻承知で「友人は大丈夫？」と聞いてきた。その一言が有り難く、嬉しかった。

「ロジックくろよん」で長岡、佐野に連絡。長岡は昨日、即退院し大町に泊まり今、大町にいるとのこと。グッド・タイミング。大町温泉郷で落ち合い、再会を喜び、一緒に帰静した。

事故の原因・・・

直接原因は、①長岡の肩が脱臼したこと。長岡は以前、肩を脱臼した事があり、ある種の動作は危険があった。

しかし、どの様な動作で「抜けるか」は、先日の病院での精密検査でも解明されていない。

ただ、過去に抜けた状態を考査すると「引っ張られて」抜けるでなく「押しつけられて」抜けるようだ、と本人は説明する。

では、今回その様な状態だったかと言うと、少なくとも「押しつけ」は無かった様に考えられるが、「抜けた」ことは事実である。

間接原因は、①短い泳ぎであったが、ザック攜り泳ぎが良かった。＝泳ぎが苦手な長岡の事をもっと考慮すべきであった。

②準備期間が短く訓練が十分でなかった。＝訓練が一回では少なかった。ザックを背負っての立ち泳ぎ、水に慣れ親しむ訓練がもっと必要だった。

③荷物の軽量化の促進。＝出発時の荷物は長岡22Kg、後藤20Kg、加藤18Kg。ただし長岡、後藤の共同装備は変わらない。軽量化を更に計りたい。

今後の対策・・・

①山スキー時に絶対ならない訳でもないのですが、一度、病院で精密検査を受け、今の状態を正確に把握する。＝現実を知る。

②脱臼しにくい動作を研究する。＝抜けやすい方向があると思う。＝自分を知る。

③整備（挿入）技術を研究する。＝入れれば何とか歩ける。

まとめ・・・

残念、無念。長岡は障害があってもそれを感じさせない人だ。常に「挑戦者」であった。でも、この程度で良かった。本人は一時かなり落ち込んでいたが、持ち前のバイタリティーで元氣も戻って来た。

山も再開し「今後、決して沢をやらないとは言っていない」と宣言。頼もしい限りだ。いずれにしろ来年、捲土重来である。



おわり

